Eutopia Theory of Patrick Geddes

by Kiyoshi Okutsu

Contents

1 The 1900 Paris Exposition Universelle
- 1-1 Two tours to USA
- 1-2 Super Summer School
- 1-3 Rue des Nations as a via sacra

2 Dunfermline Project as Eutopia
- 2-1 “For the first time in my life…”
- 2-2 A Report to the Carnegie Dunfermline Trust
- 2-3 Uniqueness of the Pittencrieff Park
- 2-4 The purification of the Glen and Preservation of the landmark
- 2-5 A Protean unity of the garden styles
- 2-6 The originality and subtlety of the Japanese garden
- 2-7 The Children's Park
- 2-8 The primitive village
- 2-9 East Lake and the primitive village
- 2-10 The Adult's Park
- 2-11 Rock Garden
- 2-12 Index Museum
- 2-13 The Japanese Tea House and Hygiene
- 2-14 Nozomu Nakagawa

3 Writing, Talking and Seeing
- 3-1 Book Criticism by Plato
- 3-2 The structure of Plato’s “Symposium”
- 3-3 Thomas More’s “Utopia”
- 3-4 Geddes as a Dialogist of Soul
- 3-5 Vision of Christmas

パトリック・ゲディスの「エウトピア」論

奥　津　　聖

芸術としての市政学、都市論は、ユートピアではなく、エウトピアと関わるべきです。つまり、すべてが良い不可能などこにもない場所（ウートピア）を想像するのではなく、どの場所もこの場所も、とりわけわたしたちが住んでいるこの町を最高最善の場所（エウトピア）に作り成すことです。これこそがダンファームリンにとってのエウトピアなのです。[1]

1　1900年、パリ万国博覧会

1-1　二度の渡米

ゲディスは、1899年2月～4月、1899年の9月～翌年4月の二度にわたってアメリカに渡航しています。それは来るべき1900年パリ万国博覧会におけるルクリュの大地球儀設営[2]のための講演および資金調達が主たる目的でした。

しかしかれにはもう一つそれと関連する大きなくわだてがありました。

かれがそれまでアウトルック・タワー[3]を主舞台として、何回も開いてきたサマー・スクールを世界中から人の集まるパリ万博という機を利用して世界的な規模に拡大した「スーパー・サマー・スクール」[4]を開催するというものです。

それを運営する為の「科学、芸術、教育の進歩のための国際協会（IAASAE）」を設立し、戦争ゲームではなく平和ゲームを行うための「国際会議」も同時に開催するというものです。

すでにゲディスは動き出していて、イギリスとフランスの協会、後にはドイツとロシアの協会のそれぞれの、会長、副会長、講義担当者等のリストも整備されつつありました。残るはアメリカのみとなり、その為の渡米となったのです。

4月に父のアレクサンダーが亡くなり遺産整理の為もあって一時帰国し「テイバー山荘」のあるパースに赴きます。そこでもゲディスは土地の有力者であり父の旧友でもあったロバート・プラー卿に面会して協力を仰ぎ、心から賛同

した卿から自由に使ってよいという3000ポンドの小切手を贈与されています。

ルクリュの大地球儀建立の為の資金集めはあまり旨く行かず、この計画は頓挫してしまいましたが、アメリカでの協会の設立は旨く進みました。

ゲディスは連日講演会や要人との会見、会食等を驚くほど精力的にこなし、多くの人々の協力の約束を取り付けました。

パリ万博の総合ディレクター、アルフレッド・ピカールから、オテル・デ・ザンヴァリッドとパリ国際会議場の美しい講義室の利用許可が下り、これで成功間違いなしと喜ぶアンナの書簡をボードマンが紹介しています（ボードマンp.171）。

またゲディスは盟友ジェームズ・メーバーに紹介されてロバート・アースキン・イーライという若者と昨冬ニューヨークで会いました。かれはイーライにジェームズ・ブライス会長のもと国際協会（IAASAE）イギリス支部では500名の会員を組織するという計画を告げ、アメリカ支部の結成を促し、事務長に就任することを要請します。かれの驚異的な活動もあってアメリカ支部の協会員数は、錚々たる重要人物も含めて400名にも達しました。ボードマンはそのリストを額面通りには受け取れないと釘を刺してはいますが。その中にはカーネギーの名前もあります。ゲディスは図書館に関する世界的権威であり、カーネギーの相談役でもあった、メルヴィル・デューイとオールバニーで会い、そのときセオドア・ルーズベルト大統領とも会談しています。

英米独仏露の5カ国に結成された協会の全体の会長にはフランスの前教育大臣、レオン・ブルジョワが、事務総長にはゲディス自身が就任しました。

この渡米は、この後ゲディスにとって重要な存在となる多くの知己を得たことも大きな成果と言えるものでした。例えば、

シカゴのハルハウスに逗留したことによって、かれが親しく「シカゴのアビス（女子大修道院長）」と呼ぶ程の生涯の友となる女性活動家、ジェーン・アダムズとの出会い。それは彼の滞在を記念する額がこの施設ハルハウスの八角堂に掲げられた程です。

シカゴでは、インドのベーダーンタ哲学の使徒、スワミ・ヴィヴェーカーナンダとの運命的な出会いも。スワミはパリで講師となることを快諾しています。

マクドナルド教授は「1900年のパリで、彼はインド芸術について講義を行い、ヘレニズム影響論を退け、インドにおける初期仏教芸術の独自の価値を強調しました。やがて、シスター・ニヴェディーダは、もう一人のゲディスの友人で

あるアーナンダ・クマーラスワーミと同様に、より体系的にこの立場を発展させていきました。ヴィヴェーカーナンダは1902年に亡くなりましたが、ニヴェディーダは1911年に亡くなるまで、ゲディスが大切にした知的な友人の一人であり続けました。」[5]と報告しています。ニヴェディーダとゲディスの出会いはこれより前で、ボードマンは「1898年の春に、ニューヨークのジョセフィーン・マクラウド嬢は、カルカッタの近くで、スワミの弟子になった英国の女性マーガレット・ノーブル（ニヴェディーダ）に会った。ノーブルは、その女性に言った、『あなたがパトリック・ゲディスと呼ばれる人について耳にすることがあれば、彼をフォローアップしなさい。彼は、弟子を作るタイプの人です。』と告げた」（ボードマンp.177）と書いています。その2年後新聞でゲディスのアメリカ講演旅行を知ったマクラウド嬢はニューヨークの豪商である姉夫妻をゲディスに紹介しています。

妻のアンナが子供たちに送り続けた膨大なアメリカ旅行の消息便りに基づいてボードマンはたくさんの人々との出会いの模様を報告していますがここでは割愛します。

連続講演会の方も一応の成果を挙げたようです。「アメリカでの3ヶ月の講演料としてゲディスは1200ドルを手にしたが、当時ほとんど無名の植物学教授としては上出来」（ボードマンp.177）とボードマンは一定の評価を下しています。

かれによれば、ボストンの夕刊紙「トランスクリプト」紙が娯楽欄で興味本位の宣伝をしたこともあって初日に600名ものボストン市民が押し掛けたということです。ボストンにおける4回の土曜連続講演の題目は、「性の進化」「進化する性」「教育における性」「社会生活における性」で、2回目からは観客が激減しました。さすがにボストンの「ヘラルド」紙は初回の講演内容を純粋に生物学の講義であり、男性性と女性性を「異化作用」と「同化作用」として捉える教授の独自のフェミニスティックな理論を展開したものと正しく報道しています。10年前にアーサー・トムソンとの共著で「性の進化」を出版したときも、ロンドンでは批難にさらされ、ニューヨークでは絶賛されたという経緯もありました。日本では、ロンドン留学中の漱石がいち早くこの書に着目したことは周知の通りです。

1-2　スーパー・サマー・スクール

ゲディスは、アウトルック・タワー刊行の『パリ、展覧会と会議集会案内』

という名の当時としては珍しい「ガイドブック」をニューヨーク、ロンドン、エジンバラで発行しました。それはパリという都市自体とサマー・ミーティングを紹介する優れたポケットサイズの小冊子で、エジンバラ地理学研究所がこの本のために制作した3枚の二色刷り地図も付されていました。

英米からのガイド付きの「パッケージ・ツアー」も企画しています。一週間で、ガイドブック、印刷プログラム、入場券5枚付きで25フランのプランから、会期中全てフリーパスで生涯国際協会員証つきの250フランまで何段階にも分かれていたようです。後者の場合はパリ万博だけでなく、それ以降の国際会議やサマー・スクールもフリーパスとなるというものです。

トロカデロ宮殿のハイ・ギャラリーにアウトルック・タワーとインデックス・ミュージアムの縮小模型をセットして、そこをツアーの出発点としました。そこから350エーカーの広大な博覧会場を俯瞰し、その後「無類の案内人ゲディス」(ボードマンp.182)によってその日の詳細なツアーが進められます。ツアーは博覧会内部に留まらず、パリ郊外への遠足も組まれていました。

講義も様々な魅力的なプログラム構成となっており、講師陣もジェーン・アダムス、アーサー・トムソン、米国社会学会初代会長レスター・ウォード、ベルギーのアンリ・ラ・フォンテーヌ、インドのスワミ・ヴィヴェーカーナンダ、ワルシャワのジーン・デ・ブロッホ、ジェームズ・メーバー、ジョン・ダンカンといった錚々たるメンバーが名を連ねています。100人の講師、8人の秘書、10人の従業員が、4ヵ月間のセッションに参加、何万人もの訪問客に対して、博覧会の主要特徴に関する公式講義は300回、特殊講義は800回開催されています。通常の大学が半期で行う講義数を遥かに上回るものです。

また120もの国際会議が開催されました。ゲディスの標語は、「戦争ゲームは終わりにして平和ゲームを」[6]というものです。ゲディスはかつて、「わたしたちは戦争については、国家の運命から個人の行為や受難、生と死にいたるまで、十分具体的な言葉やイメージで理解しています。しかし平和についてはどうでしょう？戦争状態にないといった単に抽象的な観念、単なるレトリックのそよぎ、単なる無色の否定表現しか持ち合わせていないのではないでしょうか。「戦争ゲーム（クリーク・シュピール）」という言葉を聞いたことのない人はいないでしょう。しかし「平和ゲーム（フリーデン・シュピール）」について聞いたり考えたりした人がどれだけいるでしょう？」[7]と問題提起をしたことがあります。博覧会場には平和ゲームを考える為の抽象的ではない持続可能な世界平和の為の具体的な生の素材にあふれています。博覧会から引き出された実物

教育の場がここに出現したわけです。

ゲディスにとっては若き日のパリ滞在中にできた旧友たちや今までのサマー・スクールでであった多くの人々との再会を果たすことのできた幸せな日々となりました。また初めてのであいもありました。哲学者アンリ・ベルクソン、チャールズ・ギデ、ムンダネウム（ブリュッセルの知の組織の為の世界センター）の創始者、ポール・オトレともであっています。オトレとはこの後ゲディスは共働関係に入ります。オトレのムンダネウムは最近グーグルのCMでも紹介され、「インターネットを夢見た男、オトレ、木と紙による世界最初の検索エンジン、…　ラジオとテレヴィの時代に、かれはインターネットを予見、知への世界中からのアクセスをもたらすことによって世界平和を実現することを夢見る…」といったテロップが流されています。これは2008年6月17日付けでニューヨークタイムズ紙が「忘れられたウェブ時代」と題して掲載した記事に基づいています。

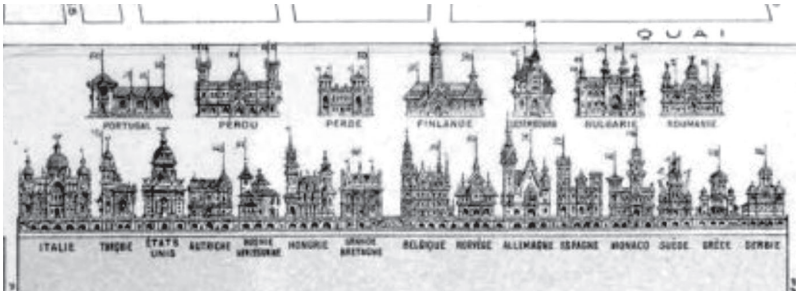
四カ国語を用いた国際学校は、1900年10月18日に無事終了し、米国パヴィリオンで盛大なレセプションが執り行われています。

1-3　リュー・デ・ナシオン（ナシオン通り）

ゲディスは、万博閉会後もパリに留まります。かれは素晴らしいパヴィリオンを取り壊すのはもったいないと考えて、再び国際協会長のレオン・ブルジョワを会長に、自らを事務総長にして「リュー・デ・ナシオンの保存委員会」を結成して精力的に働きかけを行います。これは「科学、芸術、教育の進歩のための国際協会（IAASAE）」に相応しい企てで、ボードマンは「ユネスコの種がまかれた」（ボードマンp.184）と評価しています。

部分図の上部には、ポルトガル、ペルー、ペルシャ、フィンランド、ルクセンブルグ、ブルガリア、ルーマニア、下部には、イタリア、トルコ、米国、デンマーク、オーストリア、ボスニア=ヘルツェゴビナ、ハンガリー、大英帝国、ベルギー、ノルウェー、ドイツ、スペイン、モナコ、スウェーデン、ギリシャ、セルビアの23ヶ国のパヴィリオンが林立したセーヌ河岸のナシオン通り、日本の報告書の地図では「諸外國特別館」と記載された一帯です。

図1）当時の博覧会場地図のナシオン通りの部分図

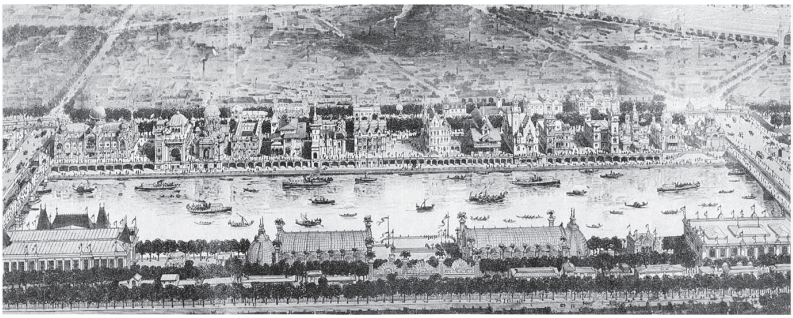


すでに帰国していたノルウェーの代表で北極探検家としても名高いフリチョフ・ナンセン博士には手紙で支持を訴え、「ナシオン通りのパノラマ」をそれに添えています。もちろんナンセンも賛同します。

しかし時すでに遅く、状況を変えることができないまま、一ヶ月の苦闘の末委員会は解散を余儀なくされます。「デルフォイの聖なる道の再開通」[8]は成らず、ゲディス的な平和のミュージアムも夢と消えました。

しかしゲディスのこれらの活動は後の時代に大きな影響を残しました。ゲディスの遺志を継いで国際連盟の創設に尽力したレオン・ブルジョワもフリチョフ・ナンセンも後にノーヴェル平和賞を受賞しています。

図2）ゲディスが手紙に添えたナシオン通りのパノラマ



ゲディスは、しかしパリの失敗にめげることなく次の計画に着手します。それは、

1）1901年のグラスゴー万国博覧会とバイリンガルのサマー・スクールの開催
2）1903年のセントルイス博覧会のための国際協会の仕事の継続

3）フェアで最も価値あるパヴィリオンのいくつかを恒久的な博物館として保存、といったプロジェクトですが、国際的な関心は薄れて行ってどれも成功裏には終わりませんでした。

2）エウトピアとしてのダンファームリン計画

1903年8月、立志伝中の人物アンドリュー・カーネギーは彼の生誕の地ダンファームリン市に50万ポンドの信託資産と自治体に隣接した70エーカーのピッテンクリーフの土地を贈与し、「カーネギー・ダンファームリン財団」を設立しました。

かれは20名の市民代表を評議員として自ら選出し、こつこつ働いているダンファームリンの市民大衆の無軌道で退屈単調な生を、もっと道理の通った親しみのあるものにする、という使命をかれらに託しました。

ダンファームリンの公園・都市計画の提言です。

「あなた方はパイオニアであるということを忘れないで下さい。失敗を恐れてはいけません。あなた方のお手本は、他のどの町にもありません。どの町にもないどの町をも超える何かをお手本とするのです」

2-1 「わたしの人生で初めての」

1903年3月、ゲディスは空席となっていたエジンバラ科学藝術博物館の館長職を得る為の最後の努力をしていたが果たせませんでした。キャリアの不足が指摘されていたため、みずから宣伝文を書いています。

> 技術的芸術的な教育に関して、わたしは直接経験なしですましたことはありません。自然主義者というものは原野や海上で単純な自然の仕事に従事するのに慣れ親しんでいます。庭園や研究所においては、ある程度より高度の技術を身につけて行くものです。生物学者の見通しというものは人間的かつ社会的な見通しに高まって行く傾向があります。それでわたしは物質的環境、都市の衛生学、都市の労働者と学生寮の改善に努めてきました。建築家とアーティストの雇用、建物の設計あるいは修理、装飾設計、学生寮のアンティークな家具を探し出すこと、といったことですら、博物館が

利用することになる類いの経験を手に入れることになります。
美術に関しては、博物館やギャラリーでの頻繁な教育の他に、最近オールド・エジンバラ・スクール・オブ・アートとして発展して来た組織[9]の管理の面だけでなく、多くの公私にわたる装飾、様々な種類の書物のイラストレーションやクラフト・デザインにもほぼ10年にわたって主導的立場にありました。

と。また、アウトルック・タワーとそのインデックス・ミュージアムについて触れ、三点において自分が有資格者であるとまとめています。
1）ミュージアムと展覧会との長年にわたる批判的な出会い
2）分類の問題に関する特殊で実験的な造詣
3）教育者としての経験
というものです。かれ自身の関心の所在が良く伺えます。
かれは、次いでロンドンかアメリカに自分の居場所を求めます。ロンドンの貧困問題を調査研究していたチャールス・ブースとハーバード大学教授、ウィリアム・ジェームスに書簡を送っています。
その中で、「インデックス・ミュージアム、総合研究所、社会学の分類、命名法、等々」[10]の講義を提供する用意があることを伝えています。

いずれの求職活動も成功せず、1903年4月、5月と6月、ゲディスは依然としてダンディー大学に留まり、8月にはパリ万博の為に中断していたエジンバラの夏のミーティングを復活させています。
ビクター・ブランフォードや他の友人たちは、アウトルック・タワーをカレッジにしようとか、さまざまなゲディス救済の可能性を模索していました。
当時のゲディスの腐心していた主要関心事は「インデックス・ミュージアム」のプランであり、それを友人のヘンリー・ビバリッジにも見せました。ビバリッジは、「市民と大学人の協会（タウン＆ガウン）」のディレクターを努めるかたわら、実はカーネギー財団のメンバーの一人でもありました。「タウン＆ガウン」は、中世以来各地の大学都市に組織された、大学都市の二つの共同体、一般市民（タウン）と大学関係者（ガウン）との共同を目指す協会であり、エジンバラの「タウン＆ガウン」は、1896年にゲディスの抱え込んでいた財政上の破綻の重荷を救済する為にかれの友人たちによって設立されたものです。
キッチンによると、ビバリッジはゲディスの会計士とは別人のジョン・ロス

博士にそのプランを見せました（キッチンp.206）。ロス博士はカーネギーの弁護士で、のちにはかれの慈善活動の分身となった人です。ロス博士はこのプランを非常に高く評価し、ゲディスの名は伏してビバリッジのアイディアとしてカーネギーに見せます。ビバリッジはそのときの大失態の模様をゲディスに伝えています。

> ロス博士は、旧石器時代から解説し始めました。カーネギーは直ちに古い時代のギリシャやローマなどは今の生活に何の関係もないといって話をさえぎってしまいました。彼の関心は現在と将来にしかありません。

不運な始まりでしたが、ゲディスには思いもよらない幸運がその年の秋にもたらされます。おそらくロス博士とビバリッジの尽力の賜物でしょう。これは都市計画者として素人同然の「ゲディスにとって初めての」コミュニティー・プロジェクトの依頼となりました。かれは直ちに詳細な地域調査にさっそく取りかかります。

1904年、四つ折りの大判で二段組230頁にのぼる膨大な斬新な工夫の凝らされたヴィジュアルな報告書が財団に提出され、出版もされました。

この報告書は、ゲディスが当時「エウトピア」をどのようなものとして構想していたのかを具体的に垣間見せる貴重な資料ともなっています。「垣間見せる」というのは、これはゲディスの意図の全体像ではなく、来るべきダンファームリンの郊外をも含めた都市の全体の将来的な改革を前提として、いわばその萌芽と成りうる計画を提示したにすぎないと思われるからです。

2-2　カーネギー・ダンファームリン・トラストへの報告書

ゲディスは報告書の「前書き」（pp.1-3）で、この実践的で実現を目的とした報告書は「小さな地方都市の環境アメニティーを維持し発展させるための計画と誓願であり、その建設的提案は現状の写真調査、その過去の再読に基づくものである」と言っています。

これは単に寄贈されたピッテンクリーフの土地の改良計画に留まるものではなく、ダンファームリンという都市全体の改良計画であることを暗に表明するものです。どの都市にも、三巻からなる「都市の百科全書（エンサイクロペディ

ア・シヴィカ)」が必要だとゲディスは言っています（p.20)。

「過去の巻」はその都市を地理的歴史的に解説するガイドブック、「現在の巻」はその都市の社会学的調査、「未来の巻」はその都市の希望の書です。

図3）報告書に付された計画全体図

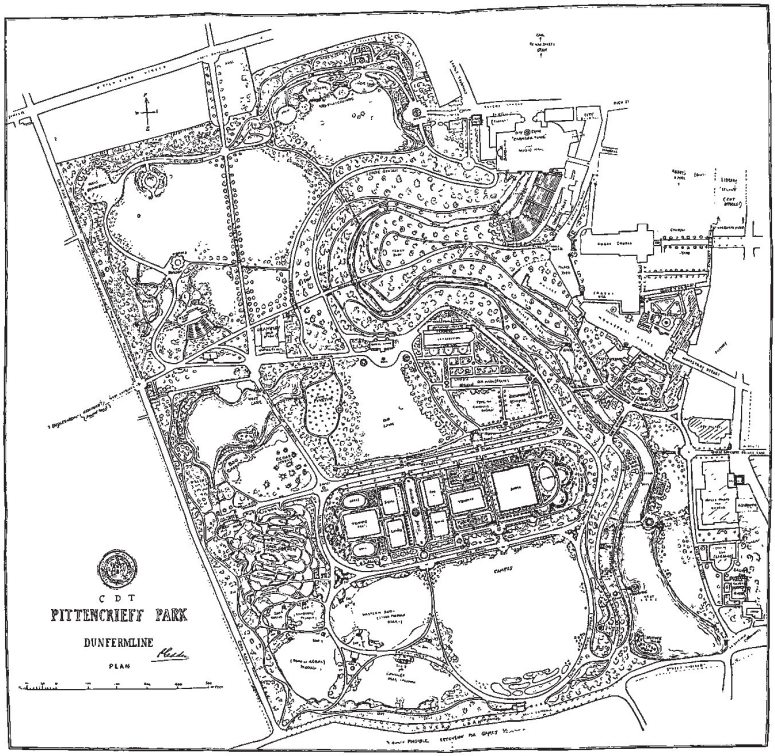


Fig. 137. GENERAL PLAN OF PARK (See note, page 20.)

ゲディスは、未だその一巻すら備わっていないダンファームリンにおいて、最初の「過去の書」から書き出さなければならなかったわけです。

現在では土台の痕跡しか残されていないマルカム三世の塔がこの都市の歴史的地理的中心です。マルカム三世はシェークスピアの『マクベス』に登場します。史実とは異なるようですが、マクベスはマルカム三世の父王を弑逆して王位を簒奪しますが、マルカム軍に敗北します。戯曲では二つの不可能と思える事態がおこらなければマクベスは無敵だと予言されていました。「人間の女の股か

ら生まれた者」には殺されることはない、というのと「バーナムの森が動かなければ」という二点でした。マルカムに助勢してマクベスを倒したマクダフは帝王切開で生まれた（女の股ではなく腹から生まれた）貴族であり、バーナムの森もあたかも動いたかに見えたことでマクベスは敗れます。もちろんこれはシェークスピアの虚構ですが、バーナムの森はゲディスがエジンバラ大学に入学する20歳まで過ごした「テイバー山荘」のあるパースの町の森です。パースの町からテイ川に沿ってバーナムの森にいたる「ヴァレー・セクション」は、少年時代に毎週土曜日に悪友たちと敢行した冒険といたずらと「地域調査」の舞台でもありました。

マルカムは王位に就いて、ダンファームリンに居城します。小さな田舎町はその後、スコットランドの首都となったわけです。

ゲディスは、ダンファームリンというこの町の名前は、三つのケルト語から成り立っていると解説を加えています。ダンは「丘あるいは砦（Dun）」、ファームは「湾曲した（Fearam）」、リンは「淵あるいは流水（Lin, Lyne, Line）」という意味の言葉で、「曲がりくねった水流上の砦」、すなわち「曲水の砦」ということになります。ゲディスが掲載した写真で、右手から見えない背後を通って左手に流れて行く渓流を視認することができます。

図4）マルカム王の塔（曲水の砦）の遺跡

ゲディスの言う「現状の写真調査」がこの報告書を独特のものにしています。報告の依頼を受けたゲディスは地元のプロカメラマン、ジェームズ・ノーヴァルを雇います。ノーヴァルは目の悪いゲディスの目となって、ゲディスが目にするもののすべてをカメラに収めました。それは全部の地域の完全な調査のた

めですが、あらゆる季節での研究という課題は残されてしまいます。半年間ほどの猶予しかなかったからです。報告書ではその一部しか掲載できないので、財団の公園委員会による全ての膨大な数の写真の保存を今後調査の為に要請しています。

例えば、全体図の左上部分の「成人の公園」の汚れた溜池の写真は、ゲディスの手で下図のように修正されます。階段、テラス、噴水が白く描き込まれています。公園のプラン地図には周囲に生け垣がありますがそれはここでは省略すると言っています。これらは全て叩き台に過ぎずもっと良い案があればどんどん提案してほしいとも言っています。

図5）溜池の現状と改良案

2-3　ピッテンクリーフの特性

カーネギーが贈与した70エーカーのピッテンクリーフの土地には二つの大きな特性があるとゲディスは指摘しています。この公園の空間は通常のものとはかなり異なっており、

その第一の特徴は、グレン（峡谷）を含んでいるという点であり、あまたの公園の景観の中で、ディーン（峡谷）ということで匹敵しうるのはニューキャッスルのジェスモンド・ディーンのみであろう、と述べています。

図6）ゲディスが借用して掲載したジェスモンド・ディーンの写真

ディーンというのは木の生えた狭い渓谷を意味する言葉で、スコットランドではグレンと呼んでいます。グレンで始まる銘柄名のスコッチは数えきれないほどあります。この特徴を生かすには、当時観光地として人気を博していたジェスモンド・ディーンを手本とすれば良いということで、報告書にはその写真（図6）も掲載されています。ゲディスは写真のような滝を起伏の比較的なだらかなグレンに小規模な形で設営することも提案しています。

第一の特徴にはジェスモンド・ディーンという「お手本」がありましたが、第二の特徴は、曲がりくねった渓流のそこかしこに歴史的遺跡や歴史的建造物が点在していることであり、歴史的な興味や関心を惹く建築的な眺めや遺跡に満ちあふれている点は他のどの公園にもないものです。

ゲディスはこの第二の特徴に着目して、「他のどこにもない」というカーネギーの要望に応える公園都市計画を構想します。

2-4　渓流の浄化と歴史的建造物の保護

ピッテンクリーフには、そこにグレンが存在しているというだけで、とてもジェスモンド・ディーンに匹敵できるような状況ではありませんでした。その渓流は、都市生活者の生活から出るゴミの捨て場となっていて、ピクチャレスクな景観とはほど遠いものでした。

従って、まず最初に取り組むべきは、渓流の水質汚染の改善でした。また渓流沿いに市民が散策できる遊歩道を整備したり、危険な場所には手摺を設けたり、編み物や読書ができるようにベンチを設置したりするといった細かい提案もされています。女性や子供たちが気軽に遊べるような小さなグラウンドも渓流沿いにところどころ設けるといった案も提示されています。

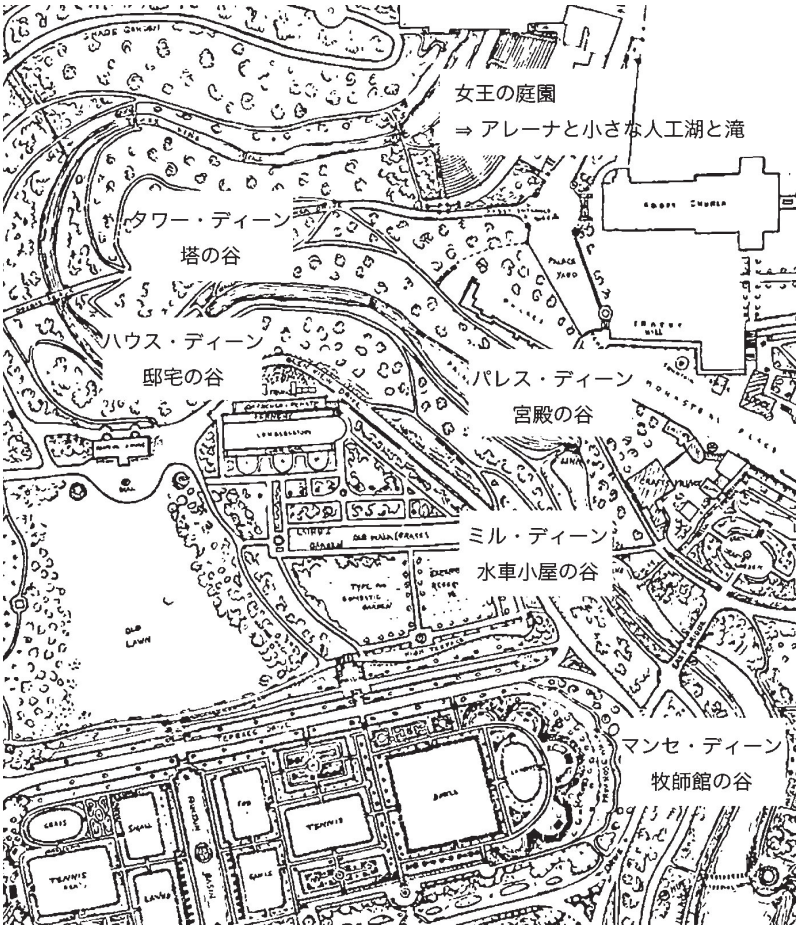
歴史的な建造物に関しては、六ヶ月にわたる地域調査の間に多くの人々から助言や手紙がゲディスに寄せられました。新聞への投書などもありました。

それらのほとんど全ては、取り壊しを勧めるものであり、ゲディスは「ダンファームリンの差し迫った破壊」の提案に危機感を抱きました。「この古都の最も典型的で美しい呼び物とも言うべき大修道院長宅のような建物ばかりか、財団所有地に立つありとあらゆる建物が一つの例外もなく」取り壊しの対象として市民から名指しされた、ということで、「荒廃した古い鍛冶工場、その対岸の古い水車小屋、聖キャサリン小路の小家屋群、これらに隣接するアン女王の邸宅（修道院の下部）」も例外ではありませんでした。新聞への投書では、二重橋を撤去して最新の工法による橋に取り替えることも主張されました（p.12）。

ゲディスは全ての歴史的遺物を保存すべきだとかたくなに主張しているわけではありません。多方面からの地域調査を徹底的に行い、多面的な考慮を加えた上で、それでも保存できないものは撤去せざるを得ないことは言うまでもありません。ただ衛生学者が不潔だからと言う理由で破壊することを進言してもそれには取り合う必要はない。建物の石が臭いわけではないので除菌すれば済むこと。ゲディスはエジンバラのスラム改革の経験も踏まえて、「進歩と衛生の名の下に破壊」（p.11）を行ったパリの都市計画の愚をここで再び犯してはならないと警告しているのです。ゲディス自身「衛生学」を重要なものと考えていましたが、それしか分からぬ専門馬鹿のいうことを聞いてはならないという意味でしょう。撤去するとしても、最悪の場合はその歴史的な素材を建築に再利用すべきだとも主張しています。実際に1908年にトマス・モア卿も居住

したことのある歴史的建造物クロスビー・ホールが取り壊されることになった時、ゲディスは友人のサンドウィッチ伯爵を動かして所有者のインド銀行を説得し建材のすべてに数字を付けてロンドン市議会に引き渡させています（ボードマンpp.211-2）。1910年に現在の場所にそれは見事に再建されました。

図7）歴史的建造物と渓流の地図



また保存対象は、特定の時代の遺物だけではなくあらゆる時代のそれであり、その基準はそれが美しいか否だ、とも言っています。

かれの基本理念は、現在の興味で過去を拙速に破壊してはならない、現在を

あまりに保守的に制約する過去を許容してはならない、過去の最善のものと現在なしうる最善のものとを合体させることによって開かれ行く未来の改良へと向かうべき、というものです。ある種折衷的な改良案と言えるものです。

2-5　変幻自在の庭園

建物と庭園の関係はゲディスにとってとても重要な問題です。両者は互いに助け合うものとならなければなりません。というよりはむしろ「庭師」ゲディスは、「庭師が建物を完成させる」（p.13）とまで言い、「人は荘重に建てる。しかる後立派に造園する。あたかも庭造りがより偉大な完成であるかの如く」というベーコンの言を引用しています。これは決して古の大邸宅と大庭園の話ではなく、現代にも当てはまるものであり、庭園の形式のいずれをも評価するが故に、このスタイルだけという形は取らずその場その場にふさわしい庭園の造営が適当だと提言しています。それは、建物の時代と文化に応じた「プロテウスのごとく変幻自在の庭園諸形式の統一」（p.14）で、どの様式もそれに相応しい場を持っているので、それに相応しい造園家の手に委ねるべきだともしています。そのようであれば、「公園や樹木の中の邸宅、湾曲した渓谷の野生美、それらが損ない合うのではなく平和裏に調和され強め合う」（p.13）ことも可能になります。

2-6　日本（庭園）の独創性と繊細さ

イギリスの伝統的な整形式庭園（フォーマル・ガーデン）とは異なる日本庭園についてはその専門家がいないという困った問題が生じます。ゲディスは、

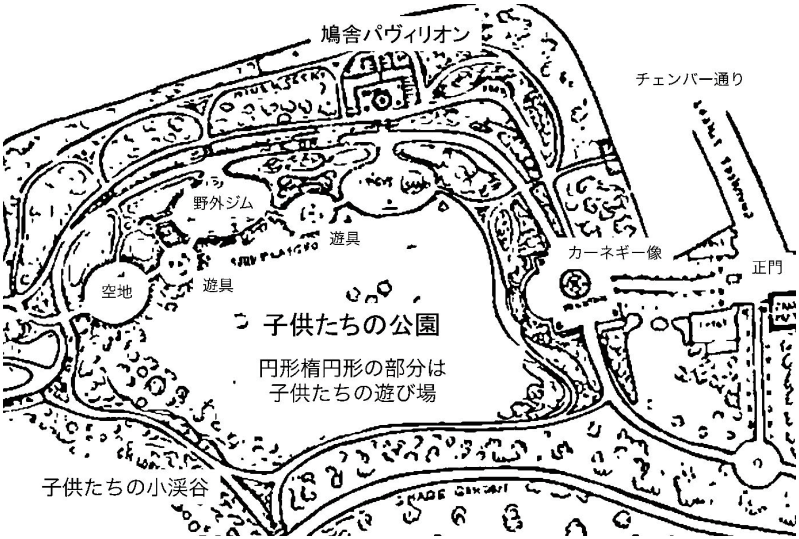
> ある人には、日本（庭園）の独創性と繊細さはかなり示唆的であると感じているでしょう。日本庭園の写真を一見すると、風情があり異風なものという印象を受けるけれども、それが日本自体の環境の典型的な特性を強調していることが直ちにわかるでしょう。自然の景観や土着の植生。日本庭園は、自然庭園のように見えながら、建築的状況や日本固有のものを念入りに適合させていることから、それは整形式庭園といえます。その形式主義としきたりはわたしたちのそれとはとても異なっているので、彼らの助力なしにはそれを再現することは不可能です。

と述べて、日本庭園の作庭に未練を持ちながら断念しています。(p.14)

この岩を富士山と見立てるといった日本的象徴主義にはついてゆけないからです。しかし模倣ではなく唯一例外的に可能なことがあるとも示唆し、それは日本の菖蒲園の作庭であると提言しています。それなら日本博物館とする予定の日本茶寮の前に小さな池をこしらえてその岸辺に菖蒲を植えることですみます。(p.57) この小さな池は「成人の公園」(図11) で言えば、野外劇場の左手にあります。

2-7　子供の遊び場公園

図8) 子供公園



公園の北側の入口付近に「子供の遊び場公園」を作って、そこを老人と子供たちの相互交流の可能な場としたいとして「様々なグループが様々なゲームを同時にかち合わせしないように行えるように配置に工夫が必要」だとするなど施設の詳細な提言を行なっています。老人たちのおかげで管理人をおく必要が無くなる、とも言っています。

円形や楕円形の部分は子供たちの遊び場で、野外ジムも一カ所もうけられています。それらを取り巻く植栽にも配慮がされていて危害を与えることのない植物が選択されています。古い歴史を有する鳩舎の周りにパヴィリオン兼避難

場所を作ります。報告書には写真資料だけでなく、以下のような透視図、平面図、立面図等が沢山掲載されています。「一目瞭然」に対する配慮です。

「子供公園」の左端には子供たちのための小渓谷も描かれています。

図9）鳩舎パヴィリオンの完成予想透視図と平面図

2-8　原始村落

アメリカの「樹木の日（Arbor Day）」の存在をゲディスは絶賛しています。この日は学校が休日になり、児童たちはみんなで植樹を行います。それは国土の森林化に寄与するだけではありません。「若い世代の実践的かつ倫理的、審美的かつ自然的な教育」（p.18）の理想的な機会をも提供します。「共働すること」の喜びも教えてくれます。

これは公園の森林化の場合に限定されるものではありません。

ゲディスは、「工芸村」（労働博物館）のできるだけ近くに「原始村」を作ることを提案しています。それは財団が雇用した労働者の手によるものではなく、子供たちの手作りの進化する原始村です。子供たちは洞窟を掘ったり、小屋を建てたり、湖ではクラノッグと呼ばれるスコットランドの湖上住居（p.121）を造ったりします。

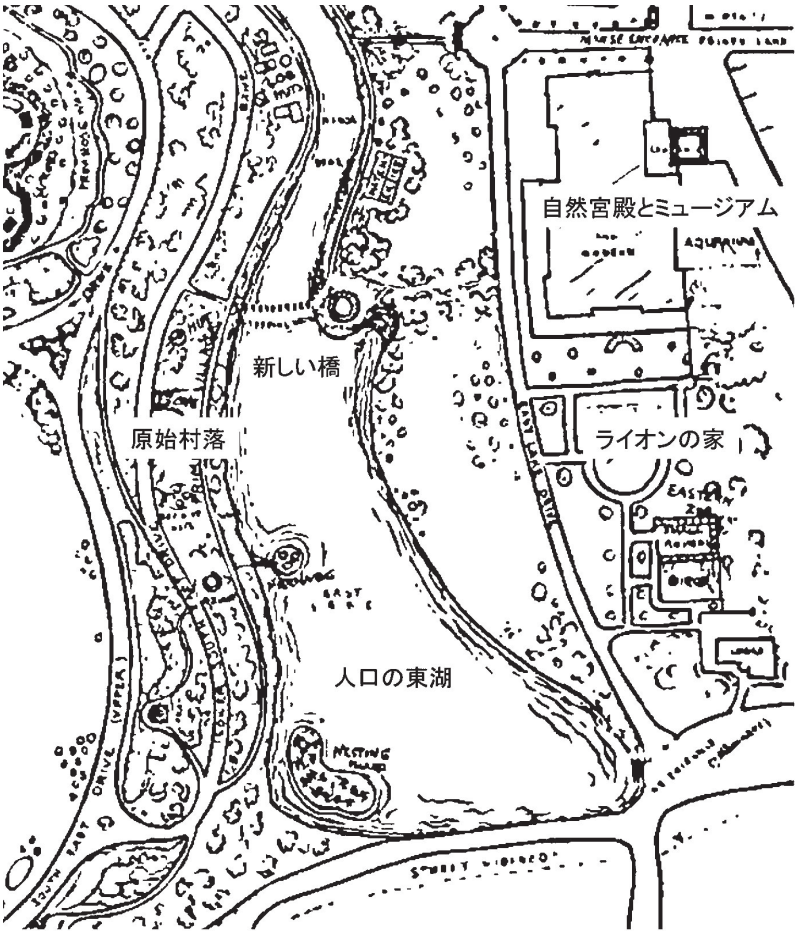
2-9　東湖と原始村落

湖というのは、渓流の南端の部分を拡張して人工的に作る計画の湖のことで、ゲディスの作成した完成地図にはその部分に「東湖」という書き込みがあります。公園の西側にも「西湖」を構想していた為です。東湖の左岸は「子供たちの、とりわけ男の子たちの活動と本能をくすぐる魅力的な野生の堤」になって

いました。そこへのアクセスのために新しい橋を架橋することも提案されています。

その橋を挟んだ右岸には、自然宮殿と野外ミュージアム、ライオンの家などが設計されています。左岸で冒険と遊びと創作とを体験した子供たちは右岸で更に深く「自然」について学ぶことができます。この一帯は、「子供公園」よりも進化した第2の「子供公園」と呼べるかもしれません。

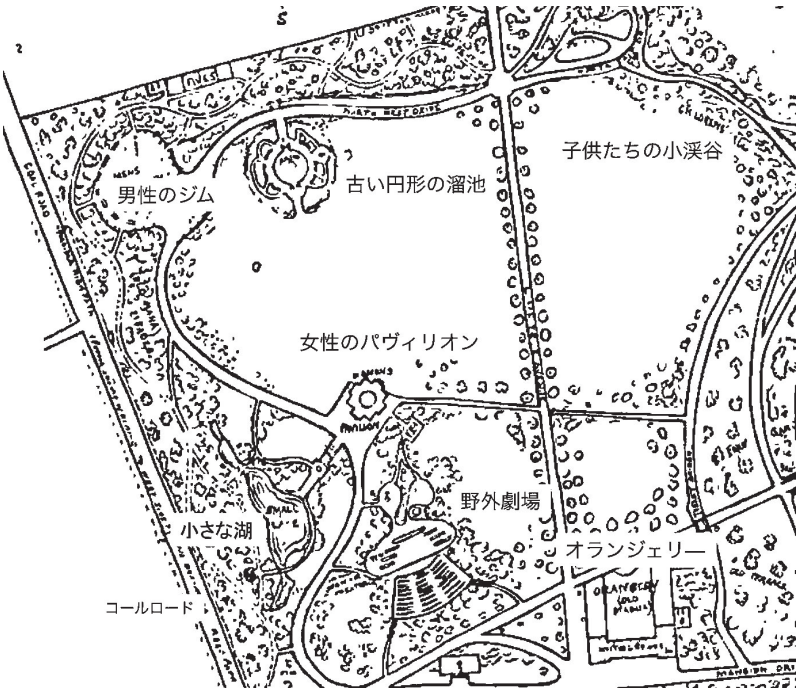
図10）東湖と原始村落と自然博物館



2-10　成人の公園

子供公園の左手の空間は、成人たちの公園です。ゲディスが写真で修正を示唆した古い溜池が周りを植栽された形で描かれています。男性のジム、女性のパヴィリオン、下方にはオランジェリー、小野外劇場、小池も見えます。この小池のそばに日本の茶寮と菖蒲園が作られることになります。

図11）成人の公園

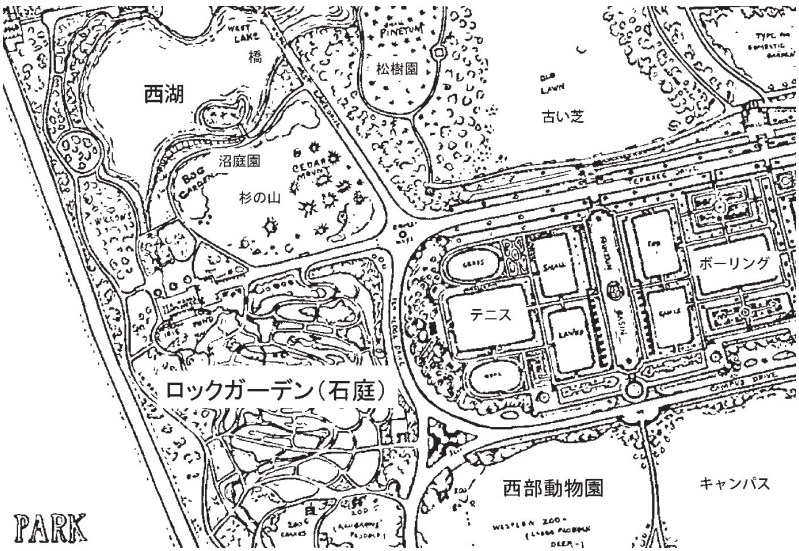


2-11　ロック・ガーデン

その下部には、東湖に対する西湖が配され、松や杉が植林され、運動場も作られます。図にはありませんが運動場の右手は子供たち専用の運動場で原始村落にも通じています。ロック・ガーデンは日本の石庭とは全く違っていて各地から収集された岩石を配して、地質学の研究にも資するように意図されていま

す。子供たちがここで遊び回ることができるように安全な歩道も完備しています。

図12）ロック・ガーデン



2-12インデックス・ミュージアム

公園と庭園と文化施設は、「市民の大聖堂」（p.19）となるとゲディスは宣言しています。それこそダンファームリンにおけるインデックス・ミュージアムです。ゲディスは世界のそれを最初は意図していましたが、カーネギーの反対を見越してそれを断念したようです。この一帯は市の中心ですから、ダンファームリンは「知と遊戯の都市」となります。

文化施設は、大修道院教会から下に、ケルトの時代から現代に至る歴史博物館、労働博物館（図7の「ミル・ディーン」）、藝術研究所、自然博物館とこの公園右側一帯に集中していますが、左側の日本茶寮は日本博物館ですし、ロック・ガーデンは野外ミュージアムでもあります。

大修道院教会の上部にはカーネギー・ホールのような音楽劇場も設計されていますので、公園全体が文化施設のおもむきを呈しています。

図13）歴史博物館群と藝術研究所

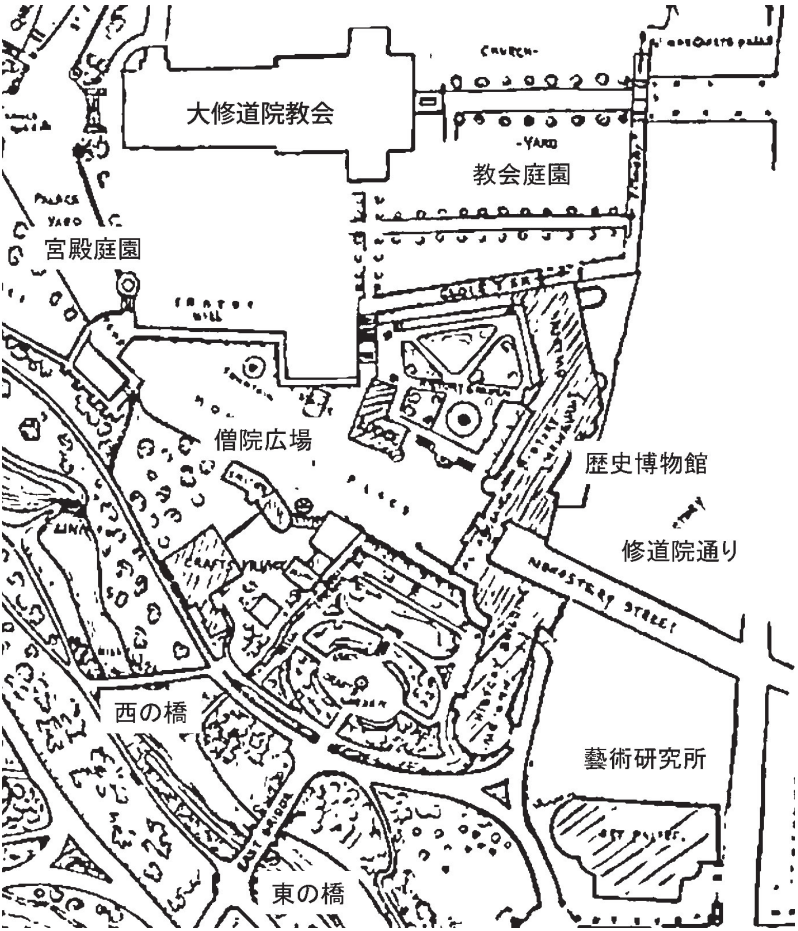


図14）アート・インスティテュート（藝術研究所）

歴史博物館は、ケルトの時代（図15）から、中世（図16）、ルネッサンスと現代（図17）へと続く細長い建物群から構成されています。

図15）歴史博物館入口、ケルト記念館

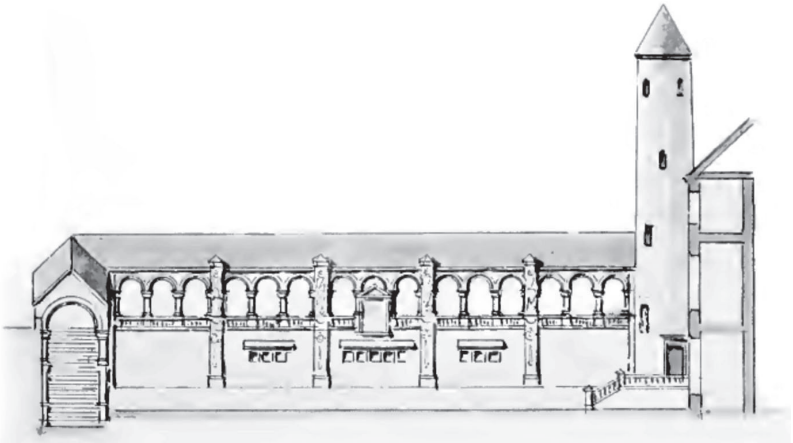


図16）歴史博物館、中世館

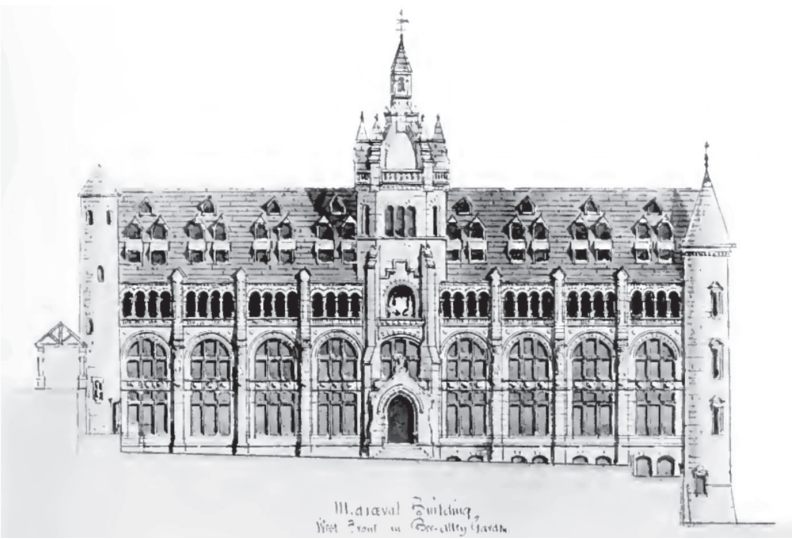


図17）歴史博物館、ルネッサンスと現代の部分の平面図

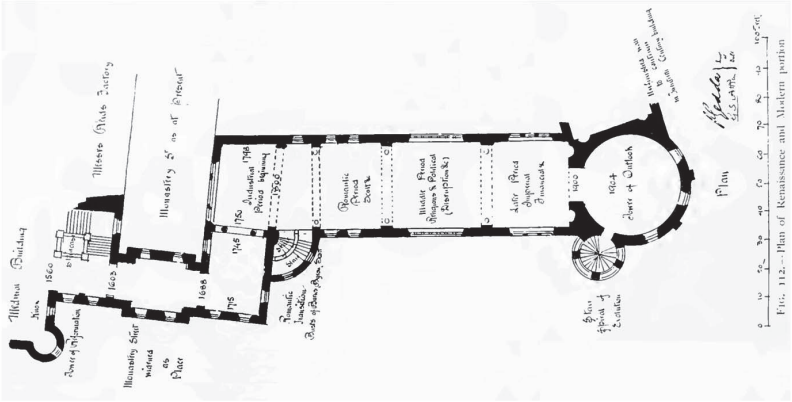


図18）自然博物館

図19）大僧院、歴史博物館、藝術研究所、自然博物館、東胡

図20）南端から北に向かう角度を変えた透視図

2-13　日本のティーハウスと「衛生学」

ゲディスは、既存の古い納屋を日本の茶寮に置き換えることを提案しています(p.56-58)。それはそのまま「日本博物館」(p.57)としても機能するものです。茶寮の設計はヨーロッパ人の手に委ねるのではなく、建物の枠組みだけでなくその本質的な細部や装飾も日本で作らせてそれを運び込む方が良いとゲディスは言っています。その方が「現実的かつ経済的」であり、何よりも「ギリシャ彫刻も日本の装飾品も私たちには作ることはできない」からです。かれは当時のヨーロッパにおける日本趣味を痛烈に批判して「ヨーロッパにおける日本の芸術の模倣は単に不細工な贋作にすぎません。そんなものを作ろうとすること自体望ましいことではない」とまで言っています。

それにも関わらず何故かれは日本的建造物にこだわるのでしょうか。その理由をゲディスは二つ挙げています。

一つには、公園というものは日常的な環境からの完全な「慰め」的変化を与えるように意図されたものであり、日本的な庭園が与える風景の変化は「そのようなレクリエーションの最も現実的な源泉の一つ」となりうるものだからです。ここを訪れる人のほとんどが、ゲディスも含めて日本を知らない人たちだ

からこそ、そのほんの一端であれ「本物」をこそここに求めたいとかれは言っています。日常からの「慰め」といった日本的美意識をかれは高く評価しているのです。

もう一つの理由は、「諸国民のなかで日本人は次の二点を最も完璧に結合することに成功しているから」だと言っています。その二点とは、

1）身体的な健康と強靭さ、従って必然的に衛生学と慰安に必須のもの

2）最大の質素と節約（経済学）

であり、一言にまとめれば、「質実剛健」といった当時信じられていた古き良き時代の日本人の理想的気質を指しているのでしょう。

「衛生学」と「経済学」の統合という指摘は、奇しくもゲディスのこの報告書の2年後の1906年にニューヨークで出版された岡倉天心の「茶の本」の茶道の思想と通底しています。

天心はその冒頭の部分で茶道の定義を行った上で、次のように述べています。

「茶の哲学は、普通の意味での単なる審美主義ではありません。というのは、茶の哲学は、倫理学と宗教と共働することによって、人間と自然についてのわたしたちのすべての考えを露にするものだからです。茶の哲学は、衛生学でもあります。というのはそれは清潔であることを実践しているからです。茶の哲学は、経済学でもあります。というのは、ゴテゴテと金をかけるよりは、質素にやることの良さを示しているからです。」[12]

日本人は、衛生学（hygiene）でもあり経済学（economics）でもある茶道を通じて希有な仕方で両者を統合することに成功したということでしょうか。

「衛生学」は、19世紀のヨーロッパにおいてスラム化した都市において健康な生を護るために提唱された新たな概念であり、ゲディスもその普及に奔走していました。エジンバラのスラムの改革においてもそれは主要な概念であったし、後の1918年にインドのインドールでかれが主催したディワーリ祭における一大行列イヴェントも、町の清掃と鼠の駆除が大きなテーマでした（ボードマン p. 294-7）。日本でも1875年には医務局が衛生局と改称されています。その初代局長の長與専齋がドイツ語のHigieneの訳語として「衛生」の語を採択したのもそれが単に個人の「養生」を意味するだけではなく都市の環境整備とも深く関わる概念であったからだとされています。

この語は、アポローンの子、医学の神アスクレーピオスの娘、ヒギエイアに

由来します。健康の女神です。アテーナの女神も時にアテーナ・ヒギエイアと呼ばれることがあります。パルテノンの神殿建築の折に、最も優秀な大工が高所から転落して重傷を負い、ペリクレスが途方に暮れていた時、女神アテーナが夢枕に立ち処方を授け大工の命が助かったという逸話をプルタルコスが伝えています。フェイディアスがそれを記念してアテーナ・ヒギエイアの像をアクロポリスの丘に建立したとも伝えられています[13]がもちろん現存はしていません。

ゲディスと天心の直接的な交流の証拠はまだ発見されていません。ただそれぞれの出会いの時期は異なるものの両者には共通の友人が二人います。

天心は、1901年末にインドに渡りカルカッタのスワミ・ヴィヴェーカーナンダを訪問し、共鳴した彼らは日本での「東洋宗教会議」の開催を画策するも、1902年にヴィヴェーカーナンダが急死してこの計画は頓挫します。スワミの死後、1910年に出版されたラージャ・ヨーガに関するかれの哲学書のフランス語版の序文を書いたのはゲディスです（ボードマンp. 183）。

もう一人の共通の友人はインドの詩聖タゴールです。天心はインド滞在中タゴールの甥の家に逗留し、『東洋の理想』を執筆し、1903年にロンドンのジョン・マレー書店から出版しています。マレーはエジンバラの出身です。ゲディスとタゴールの出会いは、かなり遅く、1917年のダージリンでの「サマー・ミーティング」の場でした。その後二人の交遊は長く続きますが、主として手紙のやり取りであり実際に会う機会はあまり無かったようです。二人のテーマは、東洋と西洋を結ぶ国際的な大学をインドに設立しようというものでした（ボードマン p. 331ff.）。

天心は1913年に死去していますので、タゴールを介してのゲディスとの思想的接触の可能性はありえないと思います。

日本の茶寮と菖蒲園の作庭という着想は、天心たちが主導した1893年のシカゴ万博の日本のパヴィリオンから得たのではないかとわたしは推定しています。それは鳳凰殿と茶寮と菖蒲園からなるもので建設中から大評判となったものです。シカゴ市はそれを「日本博物館」として永久保存することを決定しましたが、残念ながら後に火災で焼失してしまいました。

2-14　中川望

日本でゲディスのこの報告書を初めて紹介したのが中川望であることを、埼

玉大学の安藤聡彦先生が「エジンバラ・山口2004」での講演[14]で明らかにされました。報徳会の機関誌『斯民』の1908年（明治41年）の3月号に掲載された「世界の理想の都市たるべきダンフハームリン」という小論です。当時中川は32〜3歳で、4月1日付けで埼玉県の内務部長に昇進しています。その後、山口県、鹿児島県、大阪府の知事を歴任して退官しますが、関東大震災後、後藤新平の帝都復興計画が頓挫した後、縮小された復興局の最後の長官として呼び戻されています。興味深い人物ですがここでは割愛して、かれの小論について少しだけ触れておきます。ゲディスが報告書の「日本の茶寮」の節に「この節は現在の戦争（the present war）が始まる前に書かれた」と脚注を付していることについて、

> 其の中で、チヨツト面白い一端を紹介して見れば、公園地の一部に於ける森陰には、日本風の茶寮を拵（こし）らへる計書を建てゝ居る。氏が此設計書の説明をしてある所へ、特に此一篇は日露戦争以前に起草したものであると、斷り書きをして居るのは、更に面白い。なぜ斯んな事をしたのか、念ふに此設計書の中には、餘りに日本を譽め貫いて居る。それで日本が戦勝國になつたが爲めに、自分が贔屓をするやうになつたのではないといふことを明かにする積ではなからふかと思はれる。氏は日本の美術を激賞して是非この美術思想を、英國に輸入したい。せめては家々に在る、無味乾燥な暦の代わりに、日本の掛物がかゝる様にしたいものだなどといふて居る。殊に茶寮の如きは、餘程美術の趣味に富んだものとして、其れを摸擬したものでも宜いから、是非此公園内に設けて見たいとの希望である。[15]

と中川が推測しています。不思議な脚注だと思っていたので「現在の戦争」とは「日露戦争」のことだったのかと合点がゆきました。「日本博物館」だけが提案されていることは確かに奇妙なことです。ただ「其れを摸擬したものでも宜いから」というのはかれの喜びのあまりの筆の滑りで、ゲディスが偽物は駄目だと力説していたことはすでに述べた通りです。

中川は、小論ながら簡潔に「今最近千九百七年、卽ち一昨年十二月末日現在」の財団側の報告に基づいてゲディスの報告と比較していて、興味は尽きませんが割愛せざるをえません。ただ中川の結論は少し甘めで、ゲディスの「『理想が家を建つるにあらざれば、其建築は全く徒勞に歸せん』といふ語と、同一の精神を承け縫いで居るものであらうと考へます。」と財団を擁護していること

を付言するにとどめます。

この報告書は、根本においてゲディスの思想の集大成とも目されるものとなっていて、カーネギーが望んだ「どこの都市にもない」先駆的な提言でもありました。しかし財団の有力な評議員はこの提言のメリットをまったく理解できず、準備に要した費用にすら異を唱え、財団側に200部、ゲディス自身に100部印刷された報告書のゲディスが負担していた出版費用の支払いすら拒みます(これは係争後に支払われましたが)。しかしかれらにとって本当のショックは、ゲディスの都市計画の100万ポンドという見積もり額で、カーネギーの贈与金の２倍にものぼり、「財団に取ってこれは狂気の沙汰であった」、とボードマンは記しています。(ボードマンp.207)

ゲディスの提言は退けられて、ゲディスの競合相手であったプロの造園家、風景建築家、都市計画家トーマス・ヘイトン・モーソンの提案に乗り換えます。財団は直ちにモーソンの見積もりを査定しましたたが、驚くべきことにこれもまた100万ポンド。財団は、結局既存の公園施設と建物の維持管理に専念して基金を温存することを決定します。

25年後のダンファームリンの新聞の以下のような記事をボードマン（同上）が紹介しています。

「ゲディス教授の作品に対する当時の財団の取った態度が正当化されるか否かは別にして、今日の財団であれば『都市開発』（ゲディスの報告書）に多いに触発されるに違いない。当時の財団のメンバーの何人かはその本を読みもしなかったようである。それは当人の損失にとどまらず共同体の損失であった。……これほどの短期間にこれほど驚嘆すべき実り豊かな建設的提言をなしうるのは唯一天才によってのみである。」

ゲディスの精神は受け継がれたとは言いがたく、中川の予想は裏切られたようです。

3）書くこと、語ること、見ること

3-1　プラトンの書物批判

プラトンは『パイドロス』の終章で、有名な著述批判を行っています。批判の要点は以下の三点にまとめることができます。

1）書物は、質問に答えてくれない。

ソクラテスはまず文字の発明について語ります。ギリシャではヘルメスと呼ばれたエジプトの神テウトは自分の発明を誇り、これこそ「記憶と智慧の秘薬」(274e) だと言いますが、至高神タモス（ゼウス）はそれに反論します。文字はせいぜい忘れていたことを思いださせてくれる手がかりになるに過ぎず、真実の智慧ではなく見せかけの智慧、ドクサを伝えるに過ぎないと。それは「想起とドクサの秘薬」に過ぎないと言うのです。それは見事に描かれた絵画のようなもので、まるで生きているように描かれていてもこちらの問いかけに沈黙しか返さない。生きた真の対話（哲学的問答）が成立し得ない書物は構造的に無力だと言うわけです。(275c-d)

2）書物は読者を選ぶことができない。
たとえばプラトンのアカデメイアやアリストテレスのリュケイオンに入学を許された人々は、話しかけるに足る人々ですが、書物は不適当な人に対してまで語りかけてしまい沈黙を守ることができません（275d-e)。これは確かに危険なことで、次の書物批判とも関連しています。

3）書物は自分を守ることができない。
沈黙を守ることのできない書物は不当にあつかわれたり、侮られても自分で自分の身を守ることができません。作者である父親に頼るしかありません。(275e)

上記のようなソクラテスの書物批判をプラトンも共有しているはずですが、プラトンはなぜ膨大な対話編を書き残したのでしょうか？

「書かれた言葉は、生きた魂を持った言葉の影」(276a) でしかないのに、あえて危険を冒してまで著述するものがあるとすれば、それは「遊び（パイディエー)」のためだ、とプラトンはソクラテスに言わせています。パイディエーは、「子供染みた遊び」、「暇つぶし」といった意味の言葉です。パイドロスはそれを「美しい児戯」とも呼んでいます。

プラトンは若き日には悲劇作家を目指していた人ですから、対話編の著述は楽しい暇つぶしであったのでしょう。

「哲学的対話をドラマとして魂を引きつけるしかたで造型するということを、プラトンは、機知にあふれ、よろこびをもたらす戯れとして経験した。諸対話篇が現に存在するのは、とりわけこの天才的著作家の芸術的遊戯本能のおかげ

でもあるのだ。」[16]とスレザークも指摘しています。

自分を守ることのできない書物をあえて作者が命を賭して世に出す為には、危険回避の為の様々な創意工夫が必要となります。

3-2　プラトンの「饗宴」の構造

プラトンの最も世に愛された美しい対話編の一つである「饗宴（シュンポジウム）」を例に挙げてみましょう。

この饗宴は、美しい青年アガトーンが、紀元前416年に開催された大ディオニュッソス祭での悲劇のコンテストで優勝したその翌日、それを祝して開かれたという設定になっています。語り手はアポロドーロスで、ソクラテスの弟子になってからまだ三年ほどしか経っていなくてこの祝宴が行われた頃はまだ子供であったと自身で述べています。従ってかれ自身がそこに列席していたわけではなく、当時ソクラテスの信奉者であった、「いつも裸足で歩いている小さな人」アリストデーモスからその模様を聞いて、その内容に偽りのないことはソクラテス自身にも確認済みだと言っています。アリストデーモスは、クセノフォンの「ソクラテスの思い出」でも重要な役割を持って登場していますので実在の人物と言えると思います。涜神の罪を課されたソクラテスをクセノフォンが弁明する一節です[17]。そこでは神々に生け贄を捧げることも予言に耳を貸すこともしない「小さな人」アリストデーモスをソクラテスがどのように敬神の道に導いたかを示す両者の対話が紹介されています。

さて「饗宴」の語り手は、アポロドーロスなのですが、かれはアリストデーモスが語ったままを語るということで、語られた饗宴の話者である「わたし」はアリストデーモスなのです。パイドロス、パウサニアス、エリュクシマコス、アリストパネス、アガトーンとそこに列席した実在の人物たちがそれぞれに相応しい仕方で「エロース（恋）」について語り継ぎます。ソクラテスの語りは最後のクライマックスですが、これもマンティネイアの巫女ディオティマから聞いた話を語るということになっています。

この奇妙な二重三重に仕組まれた複雑で詐術的な構成によって、この書物の責任の所在は意図的に全く不明瞭なものとなっています。

3-3　トマス・モアの「ユートピア」

トマス・モアの「ユートピア」はプラトンの「饗宴」と似た入れ篭の構造を持っています。ピーター・ジャイルズという実在する友人が連れてきたラファエル・ヒュトロダエウスという仮構の奇妙な旅人が語ったユートピアという島の話をモアがそのまま記述するという体裁になっています。しかも書き終えた後で、ジャイルズ宅にまだ逗留中の筈とされているラファエルに内容に間違いがないことを確認しています。

このような作為は、思想によって弾劾を受け処刑されるかもしれない危険な時代を生き残る智慧と言うべきなのでしょうか。

ゲディスはトマス・モア卿の「エウトピア」について、アメリア・デフリーに語っています。ゲディスの忠実な使徒デフリーは以下のようにそれを報告しています。

> エラスムスと同じで、モアは駄洒落ばっかり言っている人でした。ユートピアという言葉は、ギリシャ語ではありません。しかしウートピアはどこにもない場所を意味し、したがって不可能な理想です。エウトピアはそれぞれに適応した美しい最高の場所です。シニカルに希望を喪失してしまった世界はこの後者の読みを見損なってしまいました。モアも実際にそのようなことを予見するに足るだけの原因を抱えていたのです。[18]

デフリーは、別の箇所でゲディスが「全ての大都市、特に大首都、ロンドン、ニューヨーク、ペトログラード、ベルリン、ウィーン、パリ等々は古代ローマと同じ没落の歴史を辿りつつあります。ポリスとして始まって、都市はメトロ・ポリス（首都）へと発達しましたが、メガロ・ポリス、つまり巨大化しすぎた都市になってしまいました。次ぎにくるのは資本投下されすぎて堕落した寄生都市（パラジット・ポリス）、かくして心も体もモラルも病にかかった病理都市（パトロ・ポリス）、ついにはやがてネクロ・ポリス、つまり死の都市に至ります。」（デフリーpp.199-200）と述べたことも紹介しています。そのような事態を招かない為に「わたしたちは、現在の社会的自然的環境についての本物の認識にむけて、また新たな文化にむけて活動しているのです」と言い、教育と宗教は、「偽装されたむだ口」を慎み、行政は、「業務の官僚的な偽装工作」

をやめ、「若い知識人や芸術家たちの果てしない十字鬼ごっこ[19]」や「新し物好きの流行の渦」ではなく、「一貫して持続する思想の流れ」「再創造的慰安的[20]で建設的で持続的な活力に満ちた流れ」を獲得しなければならないとも告げています（デフリーp.200）。現在もまったく状況は同じです。

デフリーはゲディスの生存中にかれの伝記を書き、絶えずかれの確認と批評を得ていました。『饗宴』の語り手アポロドーロスとソクラテス、『ユートピア』のモアとラファエルの関係に似ています。彼女の伝記に、「パトリック・ゲディスとは何者か」と題された序言をマンフォードは捧げています。かれは自分の著作『ユートピアの系譜』の中で、出典を明示せずにモアについてのゲディスの言及を古典的ユートピア批判の為に引用しています。

そこには「ユートピアは嘲笑的な名称」という、ゲディスがデフリーには語っていない言葉が付加されています。たしかにデフリーは、「ユートピアンという言葉は、長い間善意の夢想家に投げつけられるに適した軽蔑の言葉」であったことを彼女自身嘆いていますが、「ゲディスとかれのエウトピアの予言によって」、「地理学と常識の、また自然と人間の地域的観察の基盤となる岩」を手に入れることになったと述べて（デフリーp.270）、上述の引用を行っているのです。

モアは現実の世界と真逆の世界を「ユートピア」として「ありえないもの」として仮構したわけです。ゲディスの「ユートピアはギリシャ語ではない」という言葉はそのことを意味しています。それは言語としても場所としても存在し得ないものです。「エウトピア」はその虚実の皮膜の間に確実に存在しうるはずのものです。モアは本当に語りかけたい読者に「エウトピアとは何か？」という問いかけを行っているのです。その意味で、ゲディスはエラスムスやジャイルズと同様に、その書物に選ばれた読者の一人です。「ユートピア」という言葉にかけられた謎を解き、存在し得ない「ユートピアに関わる必要はない」と答え、存在しなければならない「エウトピアとは何か？」というモアの正しい問いかけに生涯にわたって答え続けたのですから。

プラトンやエラスムスやモアたちの抱いた危惧は払拭された訳ではありません。日本でも埴谷雄高が戦時中の恐怖の体験を次のように磊落に語っています。

> その頃はね、アフォリズムを書いていたわけですよ。「不合理ゆえに吾信ず」って、「Credo, quia absurdum」っていうラテン語ですよ。ラテン語をやっ

てたから、それを題にした。政府からみれば、「お前、これはなんだ。暗号だろう」「これ暗号で、通信しているんだろう」って。それをみんな持ってかれちゃったんですよ。警察の奴らには絶対わからない、詩とも散文ともつかないものを書いているわけですよ。そのうちに引っ張られていった。その当時は運動していないわけですよ。運動していないのに引っ張っていかれた。あの当時は勝手に向こうで決めるわけだから。「危ないから、お前、殺す」って言われればしょうがないわけですよ。」[21]

埴谷はわざわざ「アフォリズム」という韜晦的な文学形式で発表したにもかかわらず、誤解どころか、「意味不明」ということで殺されかけたわけです。かれは殺戮を免れましたが、その思想故に殺された人は枚挙にいとまがないほどです。

これはそんなに遠い昔の話ではありません。

3-4　魂の対話者ゲディス

ゲディスの友人であったクロポトキンもルクリュも、投獄されたり国外追放されたりしています。日本でダーウィンの『種の起原』やクロポトキンの『相互扶助論』や『一革命家の思い出』などを訳出した大杉栄は、関東大震災後の混乱の中で官憲に殺害されています。宮本常一は、「私がまだ二〇歳にならなかったころ、大杉栄の訳したクロポトキンの『相互扶助論』を読んだことがある。」と述べ、「民俗学というよりもむしろ民俗調査に興をおぼえ、自分の生きている時間のうち、もっとも多くの時間をそのことにあてるようになったのは、いろいろ考えてみて」、その本の影響が大きかったと述懐しています[22]。ゲディスと宮本常一には多くの共通性がありますが、決して偶然ではないようです。

ゲディスは、クロポトキンたちと違って穏やかな非暴力の無政府主義者でしたからそれほど政治的には危険な状態にあったとは思えません。

しかしかれは普通の意味での著述家ではなく、行動の人であり、語る人であり、視覚的思索家とも呼ばれています。学術雑誌に書く論文は別として、内容はゲディス的思想そのものであるにもかかわらず、多くの著書は共著です。彼は口述して共著者に書かせていたのではないかという疑念が拭えません。実際の口述の好例は1905年に出版された『外の世界、内の世界』です。それは、かれが「ホーム・スクール」[23]と呼んでいた毎日曜日ロンドンで妻と3人の子供

たちの前で行っていたトークをかれの妻が記録し、ゲディスが手を加えて出版したものです。

かれが主宰していた『エヴァー・グリーン』紙に発表した珠玉の文学作品のようなエッセイは韜晦趣味に満ちあふれて難解そのものです。文章を推敲し始めると凝りに凝ってしまう性癖があったようです。メレは、ダンファームリンの報告書の「最大のメリットは、多分早急に書かれた為に会話のように直接的」[24]で彼の著作には珍しく読みやすいと指摘しています。

かれは講壇哲学や学校教育の徹底的な批判者でした。そこにはソクラテスの言うような「魂の交流、活きた対話」が成立していないからです。かれ自身講壇での講義を苦手としていました。かれの学生は、黒板に板書しながら黒板に向かってブツブツ語るので何を言っているのかわからなかった、と証言しています。外に出てかれが作庭した庭園の実物の植物や生物を見せながら、その中で学生たちに講義し、会話することを好んでいました。アメリカでの講演旅行も、講演自体の評判は難解で芳しくなかったのですが、興味を持って居残った知的な聴衆との座談は大成功で、多くのファンを獲得しました。パトロンの「釣り人」と渾名される所以の一つでしょう。

筆跡の読み取りの難しさという点もあります。ゲディスはダーウィンの用いた図版を「ブリタニカ大百科事典」の『食虫植物』の項目で使用する許可を求める手紙をかれに出しました。その申し出をダーウィンは差出人が誰であるのか分からぬまま快諾し、「このような封筒でお返事することをお許し願いたい。家の者の誰一人としてあなたのサインを読み解くことができませんでしたので」と記しています。苦肉の策としてかれはゲディスの封書の差出人の名前と住所の部分を切り取って返書にそのまま貼付して送付したのです。ボードマンは、ダーウィンは、「エジンバラの人間なら誰か読み解く者がいるかもしれない」と考えたのであろうと推測しています。ゲディスはこれを面白がってダーウィンの返書を保管していました（ボードマンp.61）。報告書の全体計画図に書き込まれた文字も判読しがたいものでした。

かれがそれでも書いたのは、「遊び（パイディエー）」のためというより、ソクラテスの挙げるもう一つ別の理由によるものかもしれません。「それは、老齢の為に物忘れがひどくなったときの自分自身のために、また、同じ道を辿る他の人々の為に、想起の縁（よすが）を貯えておくためです。そのようにしてかれは、かれらが優しい葉を茂らすのを見て喜ぶことになるのです」（276d）。

自分が想い出す手がかりとして、あるいは若者の教育の為、ということです。

ゲディスは毎朝たくさんの図式を描き直し続けていました。かれはそれを「思索機械」と名付けています。一枚の思索機械はかれが死ぬまで進化し続け、完成することはありません。いったん出版したものも次の書物では手を加えられていたり、別のテーマとして登場してきたりします。最も重要な「生の図式」[25]は、かれの最後の大著にも登場していません。われわれが知っている発展途上の「生の図式」は、かれの伝記を書くに際してデフリーに懇願されて渋々書き送ったものです。かれは老齢に備えて想起の縁（よすが）を貯えていたのではなく、自分自身の日々の新たな発想の為の「思索機械」なのだと、それらの図式を見なしていた訳です。「視覚的思索家」と呼ばれるゆえんがここにもあります。

かれはまた手紙をたくさん残しています。かれがふさわしいとして選んだ手紙の読者にもたくさんの「思索機械」を送っています。それを読み解き、更に発展させるようにとかれらに促してもいます。「優しい葉が生い茂る」のを見て喜ぶ為です。

メレも指摘したように報告書は早書きゆえの読み易さがあり、また例えば、「非常に多面的な建設的提案なので、博物学者や庭師、考古学者や古美術愛好家、歴史家や美術批評家、建築家や装飾家、音楽家や劇作家、教育者やミュージアム制作者からのあらゆる批判」にさらされるであろうことを予想し、自分の提言は「それらの修正に全く開かれている」とも述べ（p.3）、絶えず読者に修正を促しています（p.17）。「問いかけ、対話を促す」というかれの著述の特徴は、他の書物にも共通しています。とりわけ教育的な著作がそうです。

かれのくわだてからは、「書物」が学校教育のような一方向性を免れ、「魂の対話」に少しでも資するようにしようとする配慮を感じ取ることができます。教える者と教えられる者とのインタラクティヴな関係性の成立が教育において最も重要であることは、ユネスコの成人教育の提唱と実践の中で気付かれたことで、それは学校教育においても同じだということをゲディスは、父親のアレクサンダーによる自分への教育を通して熟知していました。ソクラテスも同じことを言っているわけです。

ここにもゲディスの「共働参加の原理（p.18）」が働いています。と同時に、かれの著作の未完成性には「進化の原理」とでも呼びうるものも存在しているようです。

これらの問題は、「パトリック・ゲディスの教育論」とも深く関わる重要なテーマですが、別稿にゆだねることとし、以下のような興味深いエピソードを紹介するにとどめておきます。

3-5　クリスマスの幻視

1898年のクリスマスの頃に書かれたゲディスの兄のジョンの子供たちに宛てた長い手紙は「海外の愛しい子等へ」と書き出されています．ジョンの一家はニュージーランドに住んでいたからです。クリスマスが終われば、クリスマス・ツリーは、普通は翌日には捨てられてしまいますが、ゲディスはジョンの子供たちに、捨てずにもう一度点灯するように促しています。

いったいそれでどうしようというのでしょうか？ゲディスは自分の子供たちとの遣り取りをかれらに伝えています。クリスマス・ツリーの灯火は既に消されています。

ゲディスは異教の暦やスカンジナビアのエヴァー・グリーン（常盤木）について解説し、息子のアラスターに地球儀を持たせます。その応接間の中央にはランプがあります。アラスターは地球儀を傾けて持ち、太陽に見立てたランプの周りを巡回します。ゲディスはそこで太陽系についての解説を子供たちに施します。

クリスマスについてはそれを読んでおけば十分でしょうと言って、子供たちにはマタイ伝やルカ伝のキリスト生誕の物語の書かれた一節を自分で読むように促します。

その後でゲディスは「偉大なる木」に再び灯を灯します。

クリスマス・ツリーは、もはやクリスマスの木ではなくなっています。その木はあたかも天空に立ち登り、その木の芽たちは星々のように煌めき、灯された蝋燭はたくさんの太陽となり、その煌めく球体のそれぞれはたくさんの太陽の惑星たちになります。蝋燭の火が消されたとき、子供たちは見ます。聖母マリアと幼児キリスト、疲れたロバを世話するヨゼフ、王の羊飼いたち、あの特別の夜以外にはほとんど顧みられることもなくなったあの馬小屋を。

この特別の夜は中世以来多くの巨匠たちによって彩られ、わたしたちはこの世界の樹木の栄光を一瞬かいま見ることができました。しかし今、日々の日常の中で、家庭的な屋根に守られたこの家々で次々と新たな子供たちが生まれています。これこそが「自然の宇宙的宗教」であり、「わたしたちのまわりには、宇宙の無限で偏在し、不変でありながら変幻自在のエネルギーが存在していて、その中に神のごとき人間、人間世界の希望が宿っているのです」とゲディスは子供たちに語りかけます。

特別の夜だけでなく、日々世界中の至る所で新たに生まれ出る子供たちは、

永久に更新される人間性の象徴でもあります。

どの子も「普通の子、平均的な子などではありません。唯一無二の存在なのです。」つまりきみたちはすべてキリストだと言っているわけです。

ゲディスは、子供たちへの長いメッセージを次のように締めくくっています。

> ところでこの巨大な人間の可能性の中で何が最も偉大なものでしょうか？実践的なエネルギー、科学的知性、詩的情動？これらはすべて良きものです。しかしそれらの要素の更に高次の統一がもっと大切です。ちょうど三原色によって作り出される白色光のような。わたしたちは、行為と知識と思い遣りを一体化しなければなりません。そのようにして知恵に至ることができるのです。私たちはその知恵を更に広げて行く必要があります。自分だけの為にではなく他の人の為に生きること、それどころか場合によっては他の人の為に死ぬことすらありえます。そして唯一そのようになったときにこそ世界の進化は完成するのです。人びとの為に生きて死ぬ、そのような『素晴らしい子供』の誕生です。（ボードマンpp.163-4）

このようなゲディスの家庭学校は、人の為に死ぬことのできるアラスターという『素晴らしい子供』を育むことにもなりました。1917年5月に、フランス陸軍に志願して前線に赴いていた最愛の息子アラスターはドイツ兵の手に掛かって戦死します。ゲディスは、戦争は新しい理想のための聖戦などではなく、前線に志願することは、悪魔にそそのかされてガリラヤ湖の断崖から身を投げたガラダの豚の群れと同じだとして、前線行きを思いとどまるように説得したのですが、アラスターを翻意させることはできませんでした。残念ながらこの死は、「平和ゲーム」を提唱し続けてきたゲディスにとって「人の為の死」ではあり得なかったはずです。

注

[1]『都市開発:公園、庭園と文化諸施設の研究、カーネギー・ダンファームリン・トラストへの報告書』（以下報告書の引用は本文中にページのみを記す）
Patric Geddes, *City Development: A Study of Parks, Gardens and Culture-Institutes. A Report to the Carnegie Dunfermline Trust.* Edinburgh: Geddes and Company; Birmingham: Saint George Press, 1904.p.3

[2] 拙論「パトリック・ゲディスの『地人論』」、山口大学哲学研究第19巻、2012、p.48-52

[3] 同上、p.38-48

[4] Philip Boardman, *The Worlds of Patrick Geddes: Biologist, Town Planner, Re-educator, Peace-Warrior*. London, 1978.p.178（以下、伝記的記述はこの書に主として依拠。引用の場合は、本文中にボードマンとp.～と略記）

[5] マード・マクドナルド「パトリック・ゲディスと視覚芸術による文化復興　スコットランド-インド-日本」（『パトリック・ゲディス:生い茂る葉によって我らは生きる』YICA & ECA, Yamaguchi & Edinburgh, 2005,p.61）、以下この書からの引用は『生い茂る葉』と略記。

[6] P.G., Closing exhibition — Paris 1900, *'Contemporary Review'*, London, November 1900, pp. 665.　ボードマンp.182

[7] P.G., ''Cyprus, actual and possible: A study in the Eastern question', 'Contemporary Review', London, June 1897, pp. 897-907.　ボードマンp.157

[8] P.G., 'Closing exhibition — Paris 1900', p. 666　ボードマンp.187

[9] ECAの前身で現在はエジンバラ大学に統合されている。

[10] Bert Kitchen, *A MOST UNSETTLING PERSON*, Dutton Adult,1976. p.205

[11] ハーリ—・パーカーへのゲディスの書簡。キッチンp.207

[12] Kakuzo Okakura, *THE BOOK OF TEA*, New York, 1906, p.1

[13] *The Life of Pericles* 13.8, in *The Parallel Lives* by Plutarch, the Loeb Classical Library edition, by Bernadotte Perrin, 1916.

[14] 安藤聡彦「もう一つの展望を求めて」（上掲『生い茂る葉』）p.86

[15] 中川望　「世界の理想の都市たるべきダンフハームリン」『斯民』1908年3月号（明治41年）p.41

[16] トーマス・A・スレザーク「プラトンを読むために」内山勝利、丸橋裕、角谷博訳、岩波書店、2002、p.75

[17] クセノフォン『ソクラテスの思い出』第一巻第四章、Xenophon, *Memorabilia*、Perseus の当該個所、あるいはhttp://www.classicreader.com/book/1792/4/を参照。

[18] Defries, Amelia. *The Interpreter Geddes: The Man and His Gospel*. London: George Routledge & Sons, 1927, p.270（以下本文中にデフリーp.～と略記）

[19] 日本では、「田んぼ」と呼ばれているらしいがわたしは遊んだことがない。

[20] ここではゲディスは、re-creative と意味を二重化して強調表記している。

[21] マリオ・A「カメラの前のモノローグ 埴谷雄高」、集英社、2000, p.53

[22] 宮本常一著作集31「旅に学ぶ」、未来社、1996、p.18

[23] 中川望の「報徳会」の盟友留岡幸助は、「家庭学校」を創設しています。これも「ホーム・スクール」という思想を継承しています。

[24] Philip Mairet, *PIONEER OF SOCIOLOGY: the life and letters of Patrick Geddes*, Hyperion Press, 1957, p.118

[25] 拙論「パトリック・ゲディスの視覚的思索」. *科研「アジアの芸術思想の解明」の報告書*, p.10-20, (2004).
この拙論は、「やまぐち街なか大学」の講座における研究成果の一部です。